

〔研究報告〕

## 看護学生が日常生活援助の視点を養うプロセス — 日常生活経験と看護の学びにおける認識変容に着目して —

須藤みつ子<sup>1)</sup>、平川美和子<sup>1)</sup>

### 要 旨

看護学生の日常生活における認識変容プロセス、日常生活における対人関係プロセスは、看護学習者としての姿勢に影響を与える要因と考えられる。本研究では看護初学者の中でも、人との関わりの基礎となる家族と生活を共にしている学生を対象に、看護を学んだことによる日常生活における認識変容プロセスを明らかにし、看護基礎教育の示唆を得ることを目的とした。看護学生10名を対象に半構成的インタビューを行い、分析方法は修正版グランデッドセオリーを用いた。看護学生の日常生活における認識変容のプロセスは、経験と学びとをつなげていくプロセスであり、それらは「経験と学びとのつながりに気づく」「経験と学びとのつながりを意味づけする」「看護学習者であることを意識し家族と関わる」「他者に対する理解の仕方の変化を認識する」ことであった。これらのプロセスは、相互・双方向的な関係で作用していた。

本研究の結果から、看護学生がこれまでの経験の中で培ってきた経験知と、看護学習者としての実践知とが相互・双方向的な関係で、修正・形成されるような教育的関わりの必要性が示唆された。

キーワード：日常生活、看護学生、経験、学び

### I. はじめに

看護は、あらゆる健康レベルにある個人または集団の健康生活の保持増進および健康への回復を援助することであり、対人関係を基盤とした日常生活援助が看護の基盤の一つとなる<sup>1)</sup>。日常生活は、繰り返し営まれる普遍的な人間活動の一つと考えられ、看護学生（以下、学生とする）は自身の日常生活に身を置きながら、日常生活と対人関係を基盤の一つとする看護を学習する人と考えられる。ここで、人間はものごとが自分に対して持つ意味ののちとして、そのものごとに対して行為している<sup>2)</sup>ことから、学生は、看護を学んだことにより認識している日常生活と、自身の日常生活に対する認識とを作用させ合い、日常生活援助の視点を養うことにつながっていると考えられる。

教育と経験との間には必然的な関係があり、経験の連続性は経験の価値によって影響されること<sup>3)</sup>、看護教育の場は、それまでの生活過程で培われたその人なりの認識の仕方を土台に、看護者としての専門的な認識の仕方へ発展させることを目指すもの<sup>4)</sup>と述べられている。

このことから、学生の日常生活における認識は、看護学習者としての姿勢や日常生活援助の視点を養う要素の一つと考えられる。その中でも、看護初学者が日常生活において培ってきた経験をどのように看護の学びにつなげているかを知ることは、看護学習者としての姿勢、また看護職者としての認識の形成に関わる看護基礎教育において有用な要素と考える。日常生活援助に対する意味づけについては、基礎看護学実習を経験した学生に着目した報告<sup>5)</sup>がある。その中で、学生は患者とのコミュニケーションや看護師の実践を通しての指導、また日常生活援助を実施することにより、日常生活援助の実践に対する意味づけを行っていることが述べられている。このことは、学生が経験をどのように捉えるかは、看護学習者としての姿勢に影響することを示唆するが、看護初学者の「日常生活」という経験における認識についての調査は見当たらない。

本研究では、看護初学者に焦点をあてて、その中でも、社会集団の最小単位であり、かつ人間関係構築の基盤である家族と同居している学生を対象に、看護を学んだことによる日常生活における認識の変容プロセスについて

1) 弘前医療福祉大学 保健学部看護学科 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

調査することとした。

学生の生活体験に関連した調査<sup>6)</sup>では、学生の入学時の生活体験、コミュニケーションについて、経験率の低い生活体験の背景には社会の状況が関連していること、コミュニケーションのとり方への戸惑いやどのような家族背景で生活してきたのかが関連していること、また学生の生活体験に影響している背景として、具体的に、少子化や生活体験の少なさではなく社会全体の生活の利便化が背景となっている<sup>7)</sup>ことが示され、学生の生活状況の特性を踏まえた基礎看護技術の教授方法や看護基礎教育における教育方法の工夫の必要性が述べられている。看護大学生の社会的スキルに関連する生活体験についての調査<sup>8)</sup>では、看護大学生の社会的スキルには、年齢や学生生活での経験が関連しており、アルバイト経験があることや、相談相手が3人以上いることが社会的スキルの獲得に影響していることが述べられており、看護学生を取り巻く社会的環境が社会的スキルに影響していることを示している。

また、学生が経験を看護の学習にどのように関連付けているかについて、初回基礎看護学実習の学生の体験を通して調査したものでは、学生はそれまでの経験や知識から学生なりの考えで思考し始めており、その思考を指導する側の思考に置き換えず、学生の思考を大切にし、指導をすることの必要性が述べられている<sup>9)</sup>。

家族との関係性や経験についての調査では、家族の親和性と家族の自立性は、共感性または自尊感情と相関していること、その上で家族関係が良いと感じることは自分の存在価値を他者に認められるという根源的な欲求であり人間が生きる力となること<sup>10)</sup>が述べられている。また、共感性および自尊感情は父親と母親の関係によっても相関の仕方に差異があること<sup>11)</sup>や、母親との体験の共有、小さい子供の世話の体験が共感性に影響を及ぼす可能性が示唆されている<sup>12)</sup>など、個々の家族成員との関わり方も影響することが報告されている。

このことから、学生は、これまでの生活や経験、社会的環境の影響との関係性の中で、看護学習者としての認識を形成していると考えられる。

## II. 目的

学生の、看護を学んだことによる日常生活における認識変容プロセスを明らかにすることで、日常生活と看護の学びとに着目した教育方法の示唆を得ることである。

## III. 用語の定義

日常生活：看護の学び以外の日常的な「各個人の主体

的な営み<sup>13)</sup>」と定義する。

看護の学び：看護教育に必要な科目としての学びと定義する。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、日常生活における学生の認識変容について、これまでの経験、日常生活の中で形成されてきたこと、看護の学びとして形成されたことが双方向に作用しているという観点に立ち、学生の看護を学んだことによる、日常生活におけるものの捉え方の様相について明らかにしていく質的帰納的研究である。

### 2. 調査方法

#### 1) 研究対象者

A大学で看護学を専攻している1年生のうち、家族と同居を継続している学生で、研究に参加協力の得られた学生10名であった。

#### 2) データの収集方法

調査は、看護を学んだことによる日常生活のものの捉え方について、インタビューガイドに沿って半構成的インタビューを行った。面接時間は30分程度を予定し、学生が十分に語る事ができたことを確認できた時点で終了とし、実際の面接時間は20分～30分であった。インタビューの時期は平成26年12月であった。

#### 3) 分析方法

本研究は、学生の日常生活と看護の学びとは、学生が看護学習者となる以前から現在、将来に至る体験世界を取り巻く様々な社会的環境が多側面に意味づけられて、双方向に形成されているという観点に立っている。そのことから、社会的相互作用およびプロセスを構造的に捉えるのに優れている修正版グランデッドセオリー<sup>14)</sup>を用いた。データ分析は、質的研究歴を有する複数の研究者で客観性を確認しながら行った。

### 3. 倫理的配慮

本研究は研究者が所属する機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。該当する対象年次学生全員に、研究の主旨を文書と口頭で説明した。研究参加は自由意思であること、参加・不参加により、またインタビューの内容や参加状況など、研究に関する一切のことは、学生の成績には影響がなく、公平性が確保されること、インタビュー内容はレコーダーに録音し、必要時はメモを取ること、得られた情報は他に見えないよう厳重に管理し、研究目的以外には使用しないこととデータ整理が終了した段階で破棄すること、表記にあたっては個人が特定さ

れないようにすること、研究は発表すること、研究参加はいつでも撤回できること、を文書と口頭で説明し、同意書にて承諾を得た。インタビュー実施日時は、学業、学生生活に影響の生じない日時を学生の意見を優先に設定し、個人情報を保つためにインタビューは個室で行った。

## V. 結果

### 1. 対象学生の概要

研究協力者の基本属性は、男性1名、女性9名であった。同居の家族成員は、祖父母、父母、兄弟、姉妹、であった。

### 2. 分析結果

#### 1) ストーリーライン (図1)

以下、カテゴリーを「」、概念を〈〉と表記する。

学生は、経験と学びとをつなげていくことで、日常生活における認識を変容させていた。看護を学ぶ以前から学んでいる現在までの経験を振り返り、看護を学んだことによる〈新しい経験による視野の変化に気づく〉こと、〈自分の変化がわかる〉ことにより「経験と学びとのつながりに気づく」ことをしていた。そしてその気づきを看護を学んだことと対応させ、〈経験したことを学びとして解釈し方向付ける〉ことや、〈アルバイト経験の中で看護の学びを応用する〉ことにより、「経験と学びとのつながりを意味づける」ことをしていた。また人との関わり方に対して、「経験と学びとのつながりに気づく」「経験と学びとのつながりを意味づける」ことにより、「他者に対する理解の仕方の変化を認識する」ことや、〈家族との関わりの中で学びを共有したり発展させたりする〉こと、〈看護を学んだことを意識して家族との関わ

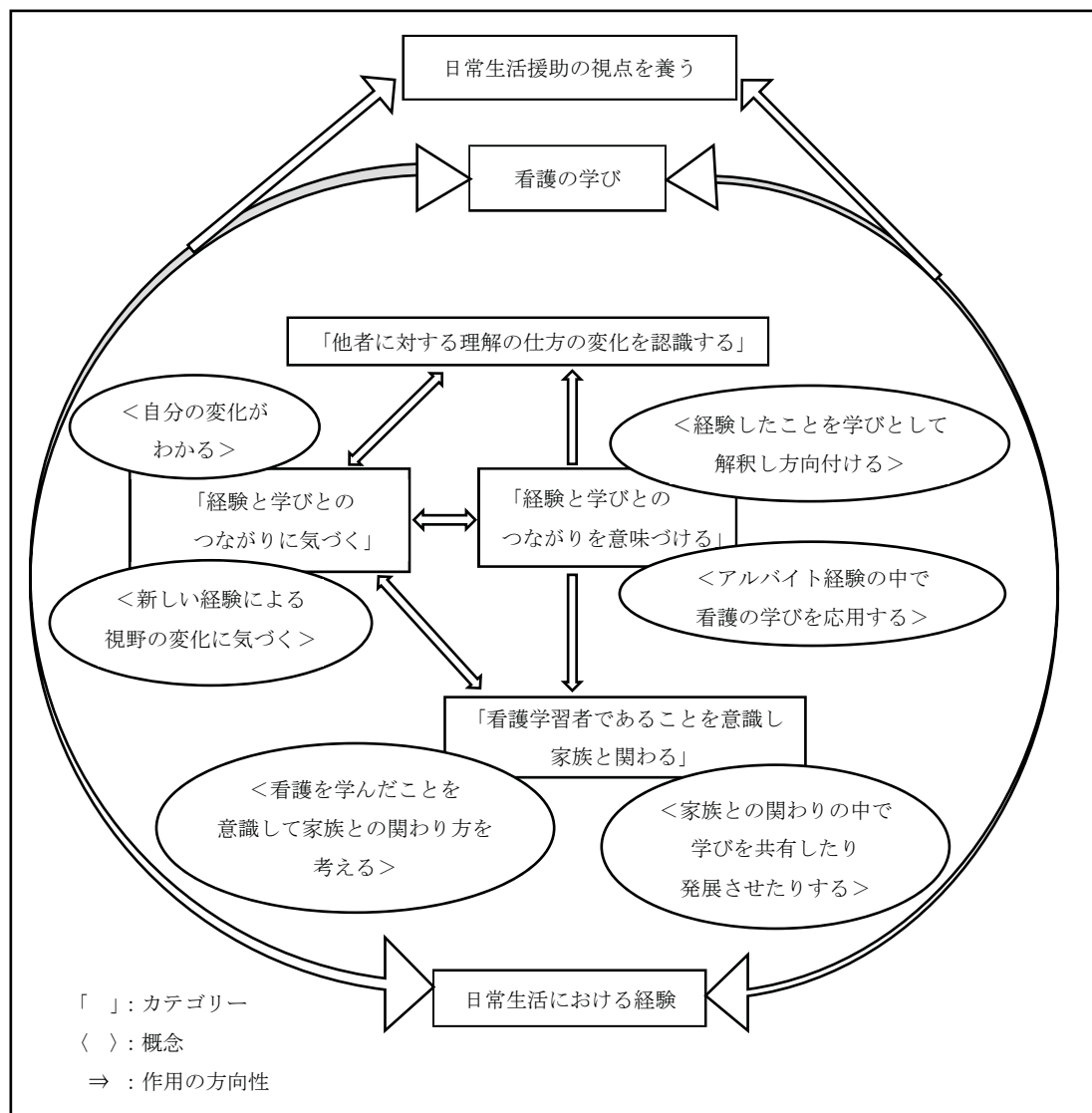


図1 看護学生が日常生活における経験と看護の学びとをつなげて日常生活援助の視点を養うプロセス

り方を考える)ことで、「看護学習者であることを意識し家族と関わる」ことをしていた。このプロセスは「経験と学びとのつながりに気づく」ことと、「経験と学びとのつながりを意味づける」ことを軸とし、相互・双方向の関係性でつながっていた。

## 2) 概念とカテゴリー

学生は、日常生活を通じて経験と学びをつなげることで、認識を変容させていた。そのプロセスは「経験と学びとのつながりに気づく」「経験と学びとのつながりを意味づける」「看護学習者であることを意識し家族と関わる」「他者に対する理解の仕方の変化を認識する」により構築されていた。

### ①「経験と学びとのつながりに気づく」

学生は、看護を学習したことによって、以前は気づかなかったことに新たに気づいたり、新しく看護の学びとして認知したことに関連して、日常生活に対する見方を広げる(新しい経験による視野の変化に気づく)、また考え方や行動の仕方が変化したことを認識し、(自分の変化がわかる)ことをしていた。

「何か、今までやってたやり方のほかに、関節によって何か普通の巻き方と違うんだなって。関節のとこで折り曲げるっていうのやったじゃないですか。あれは全然やったことなかったんで。」

「おばあちゃんは自分が小学校3年の時に亡くなってたんですけど、人工透析を受けて病院通いしていた。その時、自分、何がなんだかわからなくて、透析って聞いてあーこういうことなんだって思ったりした。家に帰って、おばあちゃんどういう病気だったの?って聞こうと思って授業の時は思うけど、家に帰ると忘れちゃう。」

### ②「経験と学びとのつながりを意味づける」

学生は自分の経験について、学んだこと、また学びから自分が感じたことを意識して対応させたり、また振り返ることで意識され始めたことについて、共通性や相違性などの性質を推測し、読み取り、またそのことにより経験と学びとの双方向の関係を形成させ、(経験したことを学びとして解釈し方向付ける)ことをしていた。また、アルバイトを学生生活とは異なる社会的な経験であると意識し、学んだ日常生活援助技術や人間関係について、共通点や相違性を考えながら(アルバイト経験の中で看護の学びを応用する)ことをしていた。

「ベッドメイキングは学校ほどシートがないのでおろそかになります。掃除もクイックルワイパーみたいなやつでよくします。でもコロコロをベッドの頭の方からす

るように意識しています。今までは適当にしていました。」

「あとは、なんかお客さん相手にするので敬語について、結構言われてて、徹底されます。普通に話してるように話したら怒られちゃって。たぶん、患者さんに話すときに役に立つ。」

「(手洗い)だいたいやってることは同じなんですけど、若干順番が違ったりするんで、どちらかというより、授業で張り出された順番より〇〇のでやっちゃう。どうだっけ、覚えてない。最初にこれやって、〇〇は専用の爪のもやる。」

### ③「看護学習者であることを意識し家族と関わる」

学習したことを家族とどのように共有し、家族との関わりの中でどのように発展させていくかについての内容である。(家族との関わりの中で学びを共有したり発展させたりする)、や、家族という社会的基本的準拠集団の中で、看護学習者としての社会的立場、社会的役割について考える(看護を学んだことを意識して家族との関わり方を考える)語りである。

「高校生の時と看護を学んでいる今と、変わりました。何か、知識がわかるので、お母さんに言われるんです。ここ悪い時どうなの、でわからない時は調べなきゃなんですけど、結構お母さんから頼られるようになった。こういう病気なんだけど、これってどういうことなのか、こういう時ってどうやって治せばいいのとか、聞かれて。で、まだ習ってないことも聞かれたりするが、そういう時は調べています。」

「クリニックの病院とかに行くんですけど、その注射やったじゃないですか。その注射、今日やったんだよ、病院で注射するじゃない、あれって難しんだねってかって。技術以外はあんまり話さないけど。クリニックの人にもよく覚えててくれて、あらまた来たのとか、たわいもない話をする病院で、その病院にお母さんも良く行ったりして、通ったりもしてたみたい。お母さんがよく病院の技術こうだったんだって、話して、自分もあーそうなんだって。自分もこういうことしてお母さんもあーいうことしたよなって。」

### ④「他者に対する理解の仕方の変化を認識する」

これまで他者に対してどのような理解の仕方をしてきたのか、そして看護で学んだ知識や経験と対応させ振り返り、他者に対する理解の仕方が変化していることを認識する語りである。

「実際、変になぐさめるより、そばにいて今日あったこととか普通に接すればいいのかなあ、って。何の授

業っていうか、何ですかね、自然と。ナイチンゲールとか、本読んで看護覚書読んで、あの人はがっつり治療というより中身からって感じ。寄り添って普通に接した方がいいのかな。」

「人間お尻から出るもんだってばっかり思ってたから、ちょっとショックって言うか、だったし、自分も便が出てるのが見えるっていうのも、ちょっといやだなんて、すごい思った。初めて見た時は、ここで便が見えてるってのは絶対いやって思ってたけど、ちょっと勉強して、そうなんでもこれから元気で、そうしていけるんだったらそういうのしても、した方がいいんじゃないかって思ってる。看護倫理で、何かケアについてとか、その人にとって一番いい方法が一番いいケアの方法とかって内容やった時、先生が事例で人工肛門つけた患者さんの事例を出して、その時におじいちゃんのこと思い出した。」

## VI. 考察

学生は日常生活における経験と看護の学びとのつながりについて、気づき、意味づけすることを軸として、日常生活援助の視点を養っていると考えられる。前述したように、経験と教育とはそれが価値あるものと認識された場合には連続性を持つ<sup>3)</sup>のであり、また、看護教育の場合は、それまでの生活過程で培われたその人なりの認識の仕方を土台に、看護者としての専門的な認識の仕方へ発展させることを目指すもの<sup>4)</sup>であることから、学生の日常生活における経験と学びとを、学生が価値づけられるような教育方法の必要性が示唆されたと考えられる。日常生活における経験と看護の学びとの連続性に着目し、看護基礎教育の方法について考察していく。

気づくこと、認知することは、次の行為の形成に作用するものであり、人間はものごとに対して意味を形成し、その意味にのっとって行為する存在である<sup>2)</sup>。野村<sup>15)</sup>は日常生活における生活体の姿を自然的態度と説明し、「日常生活者は日常の様々な出来事が現に目の前にあらわれている姿以外のものであるかもしれなという疑念をあらかじめ封じ込めてしまい、当たり前のこととして感じてしまうのであり、日常的意識のレベルにおいて、反省的な態度で現象を見定めることは難しい」と述べている。

看護の対象は生活上のニーズに何らかの支障をきたしており、対象の生活をどのように理解するかは、看護の質に影響を与える要因と考えられる。現代の若者は利便性がよい生活環境を通して、日常生活に対する認識や感性を育てていると考えられる。そのことは反面、看護の対象である生活上のニーズに支障をきたした人を理解する上で、学生が生活者としての対象をどのように捉える

かは、学生が日常生活援助の視点を養っていくことに影響すると考えられる。生活の利便性が良い現代に暮らす若者の学生が日常生活援助の視点を養っていくためには、自然的態度から看護の学びへの意識を促す教育方法が必要であることを示唆しているのではないだろうか。

他者を理解することは、人間関係を形成していくためには重要なことであり、ケアを実践していくためには、ケアの対象との人間関係の形成が重要である<sup>16)</sup>。またケアができる能力は自分自身と相手を理解することであり、共感的に傾聴することにより人間の反応に対するケアリングを養うことが出来る<sup>17)</sup>。学生が経験と学びとをつなげていくプロセスは、気づき、意味づけを軸とし、他者理解、家族との関わりの認識に作用しており、自己理解と他者理解という性質により形成されていると考えられる。他者理解と家族との関係という、いずれも対人関係の形成に関する概念が生成されたことは、学生、特に1年生看護初学者が対人関係について、自然的態度と学びとの間でよく思考していることを示していると考えられる。

家族について、個々の家族構成の行動は、それ自体独立したものと理解するのではなく、他の家族構成員との相互関係性で、そして家族全体との関係性の中で理解するのであり、また健康な家族では、両親と子供が話し合う機会や関係が作られ、家族が共通の目的や関心を持ち、共に活動する機会を多く持っている<sup>18)、19)</sup>とされる。家族の一員が看護学習者であるということに、学生と家族が双方向に理解しあう関係性が、自然的態度から看護の学びへと意識を促すことにつながっていると考えられる。

看護師の思考や感情は、その看護師の看護実践に大きな影響を及ぼすため、基礎教育の時期より看護学生に対して対象のニーズを満たす重要性や看護者としての姿勢について教育していくことは、学生の今後の看護の考え方を形成する上で重要であり、この時期に学生の日常生活援助に対する考え方を把握し、日常生活援助を実践する意味づけを認識できるように教育していくことは、今後の学生の看護に対する考え方の礎につながる<sup>5)</sup>とされる。また、看護初学者である学生は、看護技術の体験過程で単純な指摘であっても、詳細な分析をすることで具体的な仮説を導くという思考過程を辿っている<sup>20)</sup>。学生が看護学習者としての自分を意識し、日常生活と学びとを探求し意味づけできるような関わりの有用性を示していると考えられる。

学生の経験自体を教材にすることは、学生の経験と乖離した現象を用いるよりも目標達成を容易にし<sup>21)</sup>、注意を持って聴く耳があってこそ始めて言葉が生まれ、聴く側の心持や準備、そのベースがなければ、真にその言葉

を受け取ることができない<sup>22)</sup>のである。学生の有する興味や関心、経験知と、学びによる看護の実践知とが、行き来し成長しあう関係を形成していくためには、橋渡しとなる学生と教員の人間関係もまた、成長的な関係を形成していくことが必要と考える。

また、医療の高度化や急激な少子高齢化など、社会環境の変化に伴い看護職の役割は多岐に渡る。それに対応していくためには、看護職の継続教育はますます重要性が高まると考える。看護職が必要な生涯学習をいかに展開するかは、個人の自己教育の様相に依存する<sup>23)</sup>とされ、看護教育の始点である看護基礎教育の時期から、自己を理解し、自己を評価する能力を育成していく必要性が示唆される。

これらのことから、学生が日常生活において経験と学びとをつなげて日常生活援助の視点を養っていくためには、学生自らが、自然的態度から看護学習者として意識できる存在へと変化していくこと、そのために日常生活を含め自分を理解し内省していくこと、それを意識し促すためには、学生の経験知を包括的に把握、応用をし、看護学習者としての実践知に変化させていくことを意識した教育方法と、学生と教員との成長的な関係が必要と考える。

看護の対象は、療養上の世話と診療の補助を必要とする生活者であり、看護者は専門職として目的を持って、対象の一瞬一瞬の生活の時を同じにする存在であることを意識し、教育していくことが必要と考えられる。

## VII. 結語

1. 看護学生は、日常生活において経験と学びとをつなげることで、認識を変容させていた。学生は「経験と学びとのつながりに気づく」「経験と学びとのつながりを意味づけする」「看護学習者であることを意識し家族と関わる」「他者に対する理解の仕方の変化を認識する」ことを、相互・双方向の関係で作用させていた。

2. 学生がこれまでの経験の中で培ってきた経験知と、看護学習者としての実践知とが相互・双方向な関係で、修正・形成されるような教育的関わりの必要性が示唆された。

## VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究で得られた結果は、学生10名、うち女子9名、男子1名という限られた対象から得られた結果であり、一般化には限界がある。今後は対象数を増やすことや、男女の均等性を確保し、より一般性の高い結果を得る必要がある。また本研究で得られた結果は、今後一人暮らし

しをしている学生への調査をする際の手がかりとなった。

## 謝辞

本研究に協力いただいた、A大学、看護学科の学生の皆様に心からお礼を申し上げます。

(受理日 平成29年2月28日)

## 文献

- 1) 松木光子：看護学概論 看護とは・看護学とは. 第5版. 2-27. 東京：ヌーベルヒロカワ. 2010
- 2) ハーバード・ブルーマー：シンボリック相互作用論 ハースペクティブと方法. 第1版. 後藤将之訳. 東京：勁草書房. 2005
- 3) デューイ, ジョン：経験と教育. 市村尚久訳. 29-76. 東京：講談社. 2004.
- 4) 田村房子：臨地実習における看護学生の看護者としての認識への発展過程の構造. 千葉看護学会誌. 6巻2号：47-53, 2000
- 5) 近藤由香, 中村美香, 他：基礎看護学実習を経験した看護学生が捉える日常生活援助を実践することの意味づけ. 群馬保健学紀要. 36巻：7-19, 2016
- 6) 田窪香織, 三島真由美：A看護学校（3年課程）入学生の生活体験の調査 入学生の実態と科目の関連. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要. 10巻：31-40, 2014
- 7) 菱沼典子, 佐居由美, 大久保暢子, 石本亜希子, 他：看護系大学1年生の生活習慣と生活体験に関する全国調査. 聖路加看護学会誌. 15巻1号：27-34, 2011
- 8) 武田かおり, 鉢呂美幸, 工藤恭子：看護大学生の社会的スキルに関連する生活および実習体験. 地域と住民. 30号：21-27, 2012
- 9) 高井奈津子, 茶碗谷草子, 前垣綾子, 滋野和恵, 他：看護学生の日常生活体験の実態調査. 北海道文教大学研究紀要. 34号：103-111, 2010
- 10) 杉山智春：看護学生の家族関係と共感性および自尊感情との関連について. 母性衛生. 49巻4号：484-491, 2009
- 11) 杉山智春：看護学生の父親および母親との関係と自尊感情の関連. インターナショナルnursing care research. 11巻4号：125-134, 2012
- 12) 杉山智春：看護学生の共感性に影響する日常生活での体験の検討—小さい子どもの世話、父親・母親・祖父母・近隣の人々との体験の共有. インターナショナルnursing care research. 11巻3号：133-142, 2012

- 13) 薄井坦子, 兼松百合子, 林滋子, 他: 看護学学術用語. 日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会. 1995
- 14) 木下康仁: グランデッド・セオリーアプローチへの実践. 第1版. 東京: 弘文堂. 2003
- 15) 野村一夫: リフレクション 社会学的な感受性へ. 第1版. 58-68. 東京: 文化書房博文社. 1994
- 16) 多久島寛孝, 田中康子, 他: 自己理解と他者理解を深める事例検討会の意義と教育的効果—患者との援助的関係形成能力の育成に向けて—. 保健科学研究誌. 12号: 41-52, 2015
- 17) Rosalinda Alfaro-LeFevre: 基本から学ぶ看護過程と看護診断. 第7版. 本郷久美子監訳. 48-49. 東京: 医学書院. 2012
- 18) 鈴木和子, 渡辺裕子: 家族看護学—理論と実践—. 第2版. 18-23. 東京: 日本看護協会出版会. 2003
- 19) 日本家族心理学会監修: 家族心理学辞典. 第2版. 45-46. 東京: 金子書房. 2002
- 20) 林智子, 井村香積: 看護技術習得のための体験学習における学生の思考過程 車椅子移乗の事後学習. 日本看護学会論文集 看護教育. 45号: 43-46, 2015
- 21) 山下暢子, 舟島なをみ: 看護学実習における学生の「行動」と「経験」の関連 行動概念と経験概念のメタ統合を通して. 看護教育学研究. 15巻1号: 20-33, 2006
- 22) 鷺田清一: 「聴く」ことのか—臨床哲学試論. 163-165, 東京: 阪急コミュニケーションズ. 1999
- 23) 河部房子: 自己の看護体験を評価する学習過程における看護学生の自己教育の様相. 日本看護学教育学会誌. 25巻1号: 1-14, 2015

# **The Process of Development of View for Daily Lives Care of Nursing Students – The Cognitive Transformation in Experience of Daily Lives and Study of Nursing –**

**Mitsuko Sutou <sup>1)</sup> and Miwako Hirakawa <sup>1)</sup>**

**1) Hirosaki University of Health and Welfare, Department of Nursing,  
3-18-1 Sanpinai Hirosaki Aomori Japan 036-8102**

## **Abstract**

It is thought that the process of cognitive transformation that takes place in the daily lives of nursing students and the process of the development of interpersonal relations in their daily lives play significant roles in influencing the attitudes of nursing students undergoing practical training. The purpose of this study was to clarify the cognitive transformation process in the daily lives of nursing students who are just beginning their education, especially those living with their families, in which their relationships with others are formed. The study was undertaken in order to provide suggestions for basic nursing education. We conducted semi-structured interviews involving ten nursing students and analyzed the results by the modified grounded theory approach. The process of cognitive transformation within the daily lives of nursing students is a process that is connected with experience and study, a process that includes “realizing the relationship between experience and study,” “attaching meaning to the relationship between experience and study,” “relating to one’s families with the awareness of being a nursing student,” and “being cognizant of the changes and ways of understanding others.” These processes worked in reciprocal and interactive ways that connected experience and study.

The results of this study suggested a need for the revision and development of an educational program that connects a nursing student’s experience-based knowledge that has been cultivated in the past with the reciprocal and interactive practical knowledge that they have obtained in their nursing studies.

Key words: daily lives ; nursing students ; experience ; study